

# 1

## その背の感覚

決断のときは近づいていた。

昭和五十九年二月。ただけしいケタ外れの名馬に育ってくれと、いつくしみ、祈り、大事に乗ってきた二頭の馬が、同じ舞台の上で闘わなければならない日が、ついにやってきたのだ。

「岡部は、どっちに乗るのかな？」

ファンや記者たちの間で、そんな声がささやかれているのがボクの耳にも聞こえていた。

ビゼンニシキとシンボリルドルフ。ビゼンは新馬戦、さざんか賞、ひいらぎ賞、共同通信杯の四勝。ルドルフは新馬戦、いちよう特別、オープン戦の三勝。どちらも新馬戦のデビュー以来ボクが鞍上にまたがり、ほどなく開かれる三月四日、報知杯弥生賞の前まで白星街道を突き進んでいたのである。

ビゼンの馬主は藤田正蔵氏。成宮明光トレーナーが経営している明成牧場（青森県）で生まれた。一方のルドルフは、オーナーが和田共弘氏。調教師が騎手現役時代に一三三九勝をあげた野平祐二氏。和田氏が右腕ともたのむ畠山和明場長が総指揮をとる北海道沙流郡門別町（現・日高町）のシンボリストアロンで生産された。

「ビゼンを選ぶのではないか……!?」

多くの競馬ジャーナリストたちのなかにはそういった声が少なくなかった。栗毛で流星がある美しい馬だ。妙なことにルドルフ陣営の和田氏や野平氏とも縁がある。母親はベニバナビゼンという。かつて四勝した馬だが、父親はダンディールト。野平氏が騎手として晩年にかかっていた昭和四十八年、フランスの夏のセリ市で当時二歳のダンディを買った。

このことは日本競馬史の中で特筆に値すると思われるので、少しばかり寄り道をしよう。

昭和四十七年、日本で有数のホースマンとみなされていた十人の男たちが、イギリスやフランスなど競馬先進国との接触や交流を深めるため、それぞれ一千万円ずつ出し合い『日本ホースマンクラブ』をつくった。和田氏や野平氏もその一員だったが、中でも野平氏は日本一流の騎手としての目をたのまれ、馬を選び、そしてそ